

「臨床医の決断と心理」

Clinical Decision Making

佐賀医科大学助教授 福 井 次 矢 著

東京大学医学部講師・国際交流室

丸 井 英 二

clinical decision making はわが国の臨床医学には新しい領域である。これに関連して思い出すのは、かつての高橋純正氏らによる計量診断学であるが、それは必ずしもわが国で成功したとはいえない。本書で扱われているのは、計量診断学の流れとは別に、1970年代の一連のアメリカ医療変革運動の中で、生命倫理などと共に必然的に生じてきた新分野である。

新しい分野であるとはいうものの、臨床場面における決断を構成するとして著書が挙げている臨床決断分析 (clinical decision analysis)、医療認知心理学 (medical cognitive psychology)、臨床疫学 (clinical epidemiology) という3部門はそれぞれある程度は既に研究の蓄積がある。本書はこれらを総合して新しい視野を示してくれているところに新鮮さがある。

ここでは、医療の新しい考え方、見直し方を、日本語で簡潔に私たちの前に提示してくれている。まず、こうした新しい分野の導入に対して感謝したい。というのも、この分野の仕事の第一義的な意味は、とかく密室の関係となりがちな医師・患者関係や、医師の意志決定プロセスを明るい日光の下で再検討し、客観的な評価の対象とすることを可能にし、そこから医療全体の向上に寄与

するところにあるからである。

また、臨床経験のない1人の疫学者としての立場から、私も近年の臨床疫学が極めて具体的に“役に立つ”ことを目指していることに興味と期待を持っていた。その1つの成果が、こうした臨床における、より信頼性の高い医療を保証するために役立つということは、大変にうれしいことである。従来、疫学は集団についてのみ適用可能であって、個人については確率的に述べるだけであり、臨床場面での医師の意志決定のためには極めて弱い根拠しか提供できていなかったことを率直に認めざるを得ない。

本書は極めて簡潔に記述されている。著者も序文で述べられているように、各章がそれぞれ1冊の著書となるほどの内容を持っている。したがって、この本は入門的であると同時に、あるいはそれ以上に、従来この分野に興味のある臨床医がばらばらに得ていた知識をもう一度整理しなおしてみるために最適である。いずれにせよ、現状のわが国の医療について関心、意欲あるいは不満を持っている医師は、多くの知識と示唆を本書から得ることができるであろう。にもかかわらず、あるいはそれゆえに、本書だけで何かが理解できると考えるのは早計である。各章に付けられている文献を参照するこ

となしには、現実への応用は困難であろう。

もちろん、この本によって初めて clinical decision making が何であるかに触れる読者にとって、各章末の文献は、その大部分が英語の文献であることを除けば、興味を持った読者にとって、次の段階のより深い理解と実用のためのよい手掛かりとなる。

強いて問題点を挙げるとすれば、新しい分野につきものの用語、あるいはその翻訳の問題がある。著者はかなり大胆に英語の用語を日本語化して使用しているが、これらは従来からかなり様々な日本語で表現することが試みられていた。既に「医学判断学」としてこの分野を紹介してきた厚生省の長谷川敏彦氏などはこのあたりで随分と苦労している様子であった。例えば、sensitivity とか specificity などは、ありそうでいて統一的な用語がなかなか使われていなかった。時間が解決すると言えようが、本書の刊行を機にこの辺でこなれた日本語として徐々に確立してくることを期待したい。

混迷化しつつあるわが国の医療が、今一度陽の当たる場所で健全に成長することは大きな課題である。そのときに、周囲の人間がその再生と成長を暖かく見守ることのできるための客観的な共通の素地を、本書が与えてくれるであろう。もちろん、この本は万能薬ではない。しかし、医療関係者、および(できれば)それと対をなしている患者と(患者候補者である)ごく一般の人々に読んでいただければ、それぞれの立場で得るところが多いに違いないと思う本である。

A 5 判 148 頁 1988

¥2,600 円 300

医学書院 刊